Japanese Association for Religious Studies

よって、驚くべき早さで消化され、日本語におけるキリスト教研究書となって刊行された。植村の『真理一斑』（一八八四年）はその点で画期的な意義を有している。しかし、第一世代のキリスト教研究者は、いわゆる専門的な研究者ではなく、基本的にはキリスト教会の指導者であった点を忘れることはできない。こうしたキリスト教研究のあり方は、しばらくすると、一方における、キリスト教会あるいはそれに依拠した神学と、他方における、近代的学問としてのキリスト教研究との間の緊張を生じることになる。植村が関わることになった新神学問題、そしてその後の海老名とのキリスト論論争（一九〇一―〇二年）は、キリスト教研究における教会神学と近代的学問との対立の顕在化と解することができる。この対立は現代に及んでいる。

戦前のキリスト教研究も、大正期以降の第二世代の研究者になると、個々の研究領域での研究の深まりがみられるようになり、同じ欧米のキリスト教研究の紹介であっても、それは本格的で体系的な仕方で行われるようになる。その意味で、現代に至る、日本におけるキリスト教研究の基盤は、この第二世代の研究者によって形成されたと言うことができる。これは、第二世代の研究者の活動の場が、キリスト教会や神学校に限定されず、帝国大学にまで広がったことにも関連している。こうした動向は、宣教師から始まり教会と神学校に根付いた教会的神学的なキリスト教研究からの、近代的な学としてのキリスト教研究の自立と解することができるが、それは、欧米のキリスト教研究の紹介において、英語圏のキリスト教研究からドイツ語圏のキリスト教研究へのシフトが生じていることからも伺える。またこの時期、キリスト教研究は多様な動向へと分岐することになる。こうした中で、キリスト教研究の学問的な基盤は確立されたのである。たとえば、波多野宗教哲学は、戦前日本におけるキリスト教研究の精華と言うことができる。

以上の概観からわかるように、戦前日本のキリスト教研究は、欧米のキリスト教研究の流行に依存し、それを追跡することを主要な課題としたものであって、その限界を指摘することは難しくない。しかし、第一世代から第二世代の研究者が据えた土台こそが、戦後から現代に至るキリスト教研究の基盤をなしていることについては、正当な評価を行わねばならず、現代日本のキリスト教研究にも、その批判的継承が求められているのである。

戦前日本におけるイスラーム研究

後藤　明

江戸時代の日本＝漢字を媒体とする学問＝儒学（宋学）＋仏教学（漢訳仏典学）

ただし、漢語によるキリスト教学と回教学（イスラーム学）は無視

新井白石『采覧異言』（一七一三成立、二五年補訂）

『西洋紀文』（一七一五年成立、二五年補訂）

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

西川如見『増補華夷通商考』（一七八〇年刊）
いずれも地理的知識の披露＝イスラームの思想には寡黙
江戸時代の蘭学＝ユダヤ、キリスト、イスラームなどの宗教研究は含まず
幕末から、洋学（英語などによる学問）が導入＝宗教は無視
中東を経由して西欧諸国と往復した日本人＝イスラームには無頓着
明治初期から大正＝ムハンマド伝の執筆
林董訳述『マホメット伝』（明治九年、一八七六年）
英語の本『詐欺師マホメット』の翻訳
以後は英雄・英傑マホメット
日本人ムスリムの誕生とメッカ巡礼＝思想的な裏づけは希薄
一九〇二年ごろ山田寅次郎（トルコ）と有賀文八郎（インド）
山岡光太郎が一九〇九年にメッカ巡礼
日露戦争と汎イスラーム主義＝日本への期待とイスラームの日本への布教
アブデュルレシト・イブラヒム（一九〇九年来日）＝政治目的が主
日本のアジア主義（大アジア主義）者と意見交換
三三年に再来日、三八年に東京モスク＝イスラームへの知的関心＝井筒俊彦、前嶋信次
大東（大東亜）と回教（イスラーム）問題
大東（大アジア）の地理的範囲＝中東までを視野に入れた人もいる
満州事変から支那事変へ＝北支の回教徒対策＝南進論の台頭
＝南洋の回教徒
外務省調査局『回教事情』
大日本回教協会『回教世界』
林銑十郎理事長＝陸軍の工作機関とみなされる
戦後の日本イスラム協会『イスラム世界』
東亜経済研究所『新亜細亜』＝大川周明＝満鉄
回教圏研究所『回教圏』＝大久保幸次＝蒙疆協会
本格的な思想研究は少ない＝トルコ語とペルシア語が中心で、アラビア語は不足
戦後に雑誌は復刻
大川周明と『回教概論』
アラビア語の知識には疑問符がつく
研究者の姿勢と戦後＝大部分の研究者は他分野に転向
数名を除いて、戦後は別な世代が研究を担う

パネルの主旨とまとめ

星野英紀

戦前日本における海外諸宗教の研究は、戦前の国家政策と直接的に関係していた面も多く、後世、厳しい批判を受けることになった。しかし、戦前のすべての海外宗教研究を一括りに否定的評価を下すことはできないのではないか。六〇年以上が経過した今日、戦前における海外宗教研究の意義を改めて虚心坦

NII-Electronic Library Service